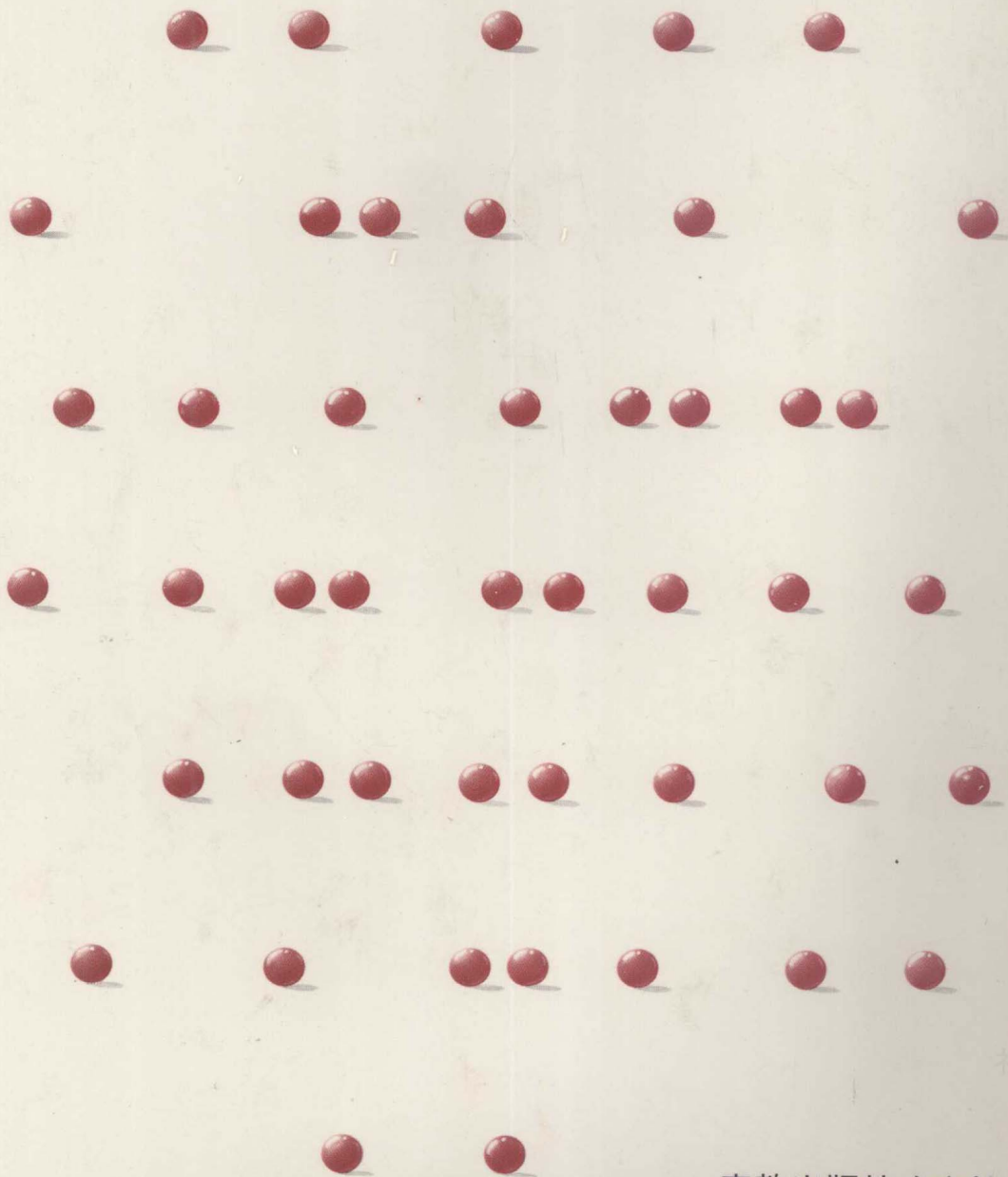


国際貿易理論体系

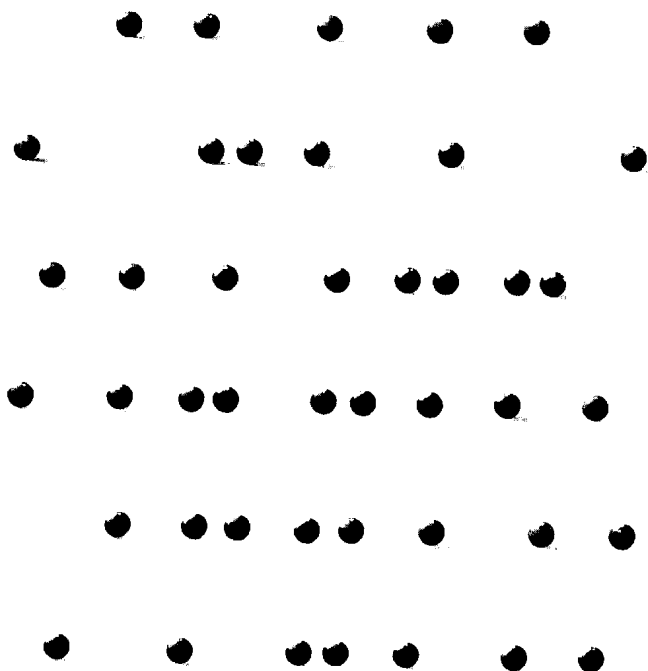
大阪外国語大学教授 梅津和郎 著



実教出版株式会社

國際貿易理論體系

大阪外国語大学教授 梅津和郎 著



実教出版株式会社

著者略歴

うめ づ かづ ろう
梅 津 和 郎

昭和 29 年 大阪外国語大学卒

昭和 34 年 京都大学経済学部大学院博士課程卒

昭和 47 年 大阪外国語大学教授

主要著者

「日本の貿易思想」(ミネルヴァ書房)「現代国際経済理論」(杉山書店)
「日本の貿易商社」(続日本の貿易商社)(日本評論社)「現代のヨーロッパ経済」(ミネルヴァ書房)「中小専門商社」(日経新書)「世界の貿易商社」(東洋経済新報社)「世界貿易分析」(有信堂)「商社」(教育社)「国民の経済学」(泉文堂)「日本商社史」(実教出版)「成金時代」(教育社)。「財閥解体」(教育社)「韓国の財閥」(教育社)

国際貿易理論体系

NDC 678.01

1980 年 1 月 20 日 第 1 刷発行

著 者 梅 津 和 郎
発 行 者 宇 野 豊 蔵
印 刷 中央印刷株式会社
製 本 株式会社若林製本工場

発 行 所 実 教 出 版 株 式 会 社

東 京 都 千 代 田 区 五 番 町 五 番 地 〒 102

電 話 東 京 (263) 0111 (大 代 表) 振 替 東 京 4-183260

© K. UMEZU 1980

定価はカバーに表示してあります。

3063—2341—3205

はしがき

私が『国際寡占と貿易理論』（法律文化社）を刊行したのは、石油危機の年、一九七三年（昭和四八年）の秋であった。内容の貧しい小著にたいして、思いがけなく書評に恵まれ感激したことを、昨日のように思いだす。当時は、いわゆる「多国籍企業行動論」にたいする批判に急であつて、国際寡占を貿易理論の体系に位置づける構想に乏しかったし、また理論と現状分析との境界にたいして厳密性を欠いていたことを反省している。

それは私だけの欠点ではなく、この分野の著書・論文に共通している欠陥でもあったように思われる。すなわち、全体の体系のなかに個々の問題を位置づけようとせず、ケース・スタディ的に個々の問題別に仮定をたててモデル構築をしていく傾向が非常に強く、そのため国際貿易現象を統一的に認識することが不可能となつてきた。

森を構成する個々の樹々を森の構図のなかに位置づけて認識していかなければ、森の景観を正確に評価できなくなつてしまう。また、森の全体像と無関係に個々の樹々を細かくせんさくしても、余り意味がない。大切なことは、国際貿易現象を全体として統一的に認識する方向である。全体像を構成する個々の問題を、全体との関連において明らかにしていく努力が必要と言へる。

本書は、このような問題意識のもとにまとめられた。したがつて、本書は国際貿易の理論史ではない。本書において引用された諸家の見解は、右の問題意識を浮彫りにするために必要なかぎり批判の対象とされたものにすぎない。国際貿易理論史は、別箇の独立した研究対象と考えられる。本書は、内外学界の先端をいく専門書でもない。それは、別箇の形式でまとめられるべき性格を持つと言へる。本書は、そのような専門書にいたる前段でじゅうら

いの混乱や誤りを是正し、整理したものであって、学部で使用する教科書としての性格もあわせそなえている。いわば全くの入門書と専門書との中間に位置しながら、学部学生にも分かり易く、私なりに問題を提起した体系とと言える。

今後、読者のかたがたの御叱正を得て、内容をより向上させていきたいと念願している。

最後になったが、出版事情がとりわけ困難なこんにち、本書の刊行にさいしてたいへんお世話になった実教出版開発部の皆さんに心から感謝申し上げたい。

昭和五四年九月二日

京都洛中にて

梅 津 和 郎

目次

3	目次	
	第一章 国際貿易の概念	1
	1. 外国貿易と国際貿易	1
	外国貿易概念の限界	1
	リカアードの貿易概念	3
	オーリンの見解	4
	マルクスの見解	5
	行沢教授の見解	6
	2. 諸概念の整理	7
	国際貿易と国際経済	7
	世界貿易と世界経済	9
	外国経済	10
	国際経済関係	10
	3. 国際貿易における歴史と理論	11
	歴史認識の限界	11
	理論設定の意味	11
	第二章 体系化の志向	13
	1. モデル構築への反省	13
	国際貿易理論とモデル構築	13
	モデル構築の失敗	14

2. 体系化の意義	15
-----------	----

没理論的体系化	15
古典派的体系化	16
全体像を把握する体系化	19

3. 国際貿易理論体系の内容	20
----------------	----

競争と国際貿易	20
資本蓄積と国際貿易	21
独占と国際貿易	22
概念の厳密化と理論的斉合性	22

第三章 国際分業と貿易	24
-------------	----

1. 国際分業の形成原理	24
--------------	----

国際貿易と分業形成	24
比較生産費説の展開	26

2. 資本蓄積と国際分業	30
--------------	----

国際分業と競争	30
国際貿易における資本蓄積	32

3. 国際分業と貿易の方向	33
---------------	----

追い上げ過程と国際貿易	33
経済発展と国際貿易の流れ	35

第四章 国際貨幣と価格	38
-------------	----

1. 国際貨幣の機能	38
------------	----

国際貨幣はなぜ必要か	38
国際貨幣と貿易	39

2. 国際価格の形成	41
------------	----

国際価格とは何か	41
国際商品と価格水準	42

3.	競争と国際価格	45
	国際貿易における競争と価格	45
	国際価格の歪み	46
第五章 競争と交易条件		
1.	貿易利益の概念	48
	比較生産費説と貿易利益	48
	貿易利益の定義	49
2.	交易条件指数	51
	貿易利益の測定	51
	交易条件指数の代表例	53
3.	競争と貿易利益	56
	国際貿易における競争と貿易利益	56
	貿易利益と資本蓄積	57
第六章 貿易収支		
1.	貿易収支の内容	62
	貿易収支の概念	62
	貿易収支と国民経済	63
2.	貿易収支の調整	64
	調整の意味	64
	価格効果と所得効果	66
3.	資本蓄積と貿易収支	70

ハロッドの命題	70
競争条件の変化と貿易収支	73

第七章 資本移動と貿易

1. 国際資本移動の内容	77
国際資本移動の定義	77
国際資本移動の種類	78
2. 国際資本移動の条件	80
資本移動の前提	80
サミエルソン・ストルパー命題	81
資本移動の原因	82
3. 国際資本移動と貿易効果	85
貿易効果の意味	85
国際貿易の変質	87

第八章 国際移民と貿易

1. 国際移民の意味	89
国際貿易理論と移民	89
国際移民の定義	90
2. 国際移民の条件	91
同質的文化構造	91
代替関係と資本の需要	92
補充関係と資本の需要	93
3. 国際移民の貿易効果	94
国際収支効果	94
生産力効果	94

第九章 国際収支

1. 国際収支の内容

国際収支の概念

98

国際収支の項目

100

98

2. 国際収支の調整

国際収支の均衡と不均衡

101

吸収効果

103

101

3. 国際収支と国際貸借

国際貸借の概念

106

国際収支と国際貸借の相互連関

107

106

第十章 為替相場

1. 外国為替市場の成立

外延的信用の拡大

111

為替相場の成立

113

国際収支説と購買力平価説

113

為替市場の安定条件

117

111

111

2. 国際短期資本移動と為替相場

国際短期資本移動と誘発項目の意味

121

為替相場の攪乱要因

123

為替相場の危険回避

124

121

3. 資本蓄積と為替相場

蓄積過程と為替相場

126

循環過程と為替相場

127

126

第十一章 國際貿易と景氣循環

1. 國際貿易理論体系における景氣循環の位置	129
景氣循環論の位置	129
研究の視点	130
2. 波及効果	131
波及効果の意味	131
波及効果と貿易	134
3. 始発効果	136
始発効果の意味	136
始発効果と貿易	137
4. 貿易と循環局面の同時化・非同時化	140
同時化・非同時化の論理	140
貿易の役割	141

第十二章 寡占と貿易

1. 寡占と貿易理論	142
國際貿易理論体系における寡占の位置	142
研究の視点	143
2. 寡占と國際分業	145
寡占と國際分業の変質	145
貿易の変化	150
3. 寡占と貿易利益	152
寡占と貿易利益の意味	152
交易条件指数の変質	153

4.	寡占と国際資本移動	154
	資本移動の条件変化	154
5.	寡占と為替相場	158
	競争・協調と為替相場	158
	スタグフレーションと為替相場	159
6.	寡占下の貿易と景気循環	160
	景気循環の変質	160
	貿易におよぼす効果	161
参考文献		165
さくいん		

第一章 国際貿易の概念

1 外国貿易と国際貿易

外国貿易概念の 限界

よく知られているように、アダム・スミスは、「余剰の吐け口」ならびに「生産力の引き上げ手」として貿易をとらえた。すなわち、前者は国内市場の狭隘を克服し国内需要をこえる余剰生産物にたいしてその吐け口を与える意味においてであった。後者は、市場の規模を拡大することによって分業を改善し一国の範囲内で生産力の一般の水準を高める役割を演ずる。スミスの「余剰の吐け口」理論および「生産力」理論は、あまりにも有名であってここで繰り返して述べる必要もないほどである。

スミスの「余剰の吐け口」理論なり「生産力」理論は、国内市場に對置する意味での外国貿易としてとらえられていた。産業革命の時期に急速に生産力を拡大しつつあった機械制大工業が、国内市場の壁に衝突して外国市場を求める歴史過程を認識したのが、いわゆるスミスの理論であった。

スミスが『諸国民の富』(An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations)を執筆したのは、一七七六年であった。スミスの生きた時代は、イギリスが「世界の工場」としての独占的地位を確立していく過程であった。だから、イギリスにとって国外市場はその大工業にとっての独占的な市場以外の何ものでもなか

った。

スミスの「余剰の吐け口」理論にたいする批判として、国内市場の狭隘が外国貿易の原因ではなく、外国貿易はその狭隘以前から歴史的に成立していたとする見解がある。マルクス主義の立場をとる経済学者から放たれたこの種の批判は、二重の誤りをおかしているように思われる。第一に、スミスは産業革命の結果成立した機械制大工業が国内市場を限界をこえる過程として外国貿易をとらえたのであって、そこには國際貿易の概念が欠けていたと言わねばならない。第二に、外国貿易が歴史的に成立していたのは疑いもない事実であるが、機械制大工業が確立する以前とそれ以後とを区別する必要がある。その歴史認識を欠くならば、理論化の前提となる同質性が失われることになる。つまり、国内市場狭隘以前に外国貿易が歴史的に成立していたとする批判は逆に、歴史認識を欠如したものだと言わねばならない。

スミスは、機械制大工業が国内市場を征服して外国市場を求める歴史的過程をそのまま理論と称したにすぎなかった。スミスの見解は歴史認識にもとづいており、そこから理論への発展を実現し得なかった。なぜなら、国内市場に対置した外国貿易であり、そこから一般的な条件を導出できなかったからである。具体的に述べるならば、国内市場とは産業革命の推進期に「世界の工場」の地位を獲得したイギリスのそれであった。したがって、そこには競争条件の入りこむ余地がなかった。ある国の国内市場が狭隘にならなくとも、競争さえ作用していれば、それに打ち負かされぬため輸出を促進せざるを得なくなる。また、外国貿易が介在して一国の生産力水準を高めると言っても、すべての貿易参加国のそれを一様に引上げることを保証するものではない。「世界の工場」であったイギリスの生産力水準を高めることができたとしても、後進国がそうであったとは言えない。

理論が成立するためには、同質性を前提として一般的な条件を対象としなければならない。スミスの余剰の吐け

口理論および生産力理論は、歴史過程そのものの認識にとどまってい理論として成立し得なかったと言える。

リカアードの貿易概念

リカアードは、『経済学および課税の原理』(On the Principle of Political Economy and Taxation, 1817)において国際貿易の概念を提示した。彼は、資本と労働との移動が不自由な境界を国境と定義した。その国境内においては資本および労働の移動は自由であるから、競争が貫徹する。したがって、一国内で諸商品の相対価値を支配する規則(価値法則)が支配する。だがひとたび国境をこえれば価値法則は修正される。

リカアードの概念規定については、二つの面から批判が寄せられてきた。第一は、リカアードが労働価値説に依拠している理由からである⁽¹⁾。それはきわめて主観的な批判であって、リカアードの方法そのものを対象としていないように思われる。リカアードは、広義の経済法則が修正される場として貿易をとらえているのであって、それは国内市場における競争が国際間では変質するという認識にたっている。そこでは、スミスのように国内市場に対置された外国貿易ではなく、国境によってへだてられたすべての国が参加する貿易の一般的条件が展開されている。

リカアードにたいする第二の批判は、資本と労働が国境をこえる移動の不自由な「程度の差」にすぎないという根拠にもとづいている。それによれば、国内にも労働の自由な移動を妨げる「非競争集団」が存在しているし、国際間でも資本および労働の大規模な移動が実際に生じている、と⁽²⁾。この批判は、リカアードの定義を量的な次元に卑小化する役割を演じている。リカアードが言おうとしたところは、国内市場に国際間との競争の質的な差異であった。彼の批判者たちが彼の意図を卑俗化して解釈したために、国際貿易理論が厳密な体系化の道を踏みはずして、際限のない細分化から生じた知的遊戯のジャングルを彷徨していくことになる。

いくら議論を細分化してみても、厳密な体系をもたないかぎり国際貿易理論の全体像をえがきだすことはできな

い。リカアードが与えた定義は、国内市場における競争と国際間のそれとの質的な差異を指摘した点で重要と言える。

オーリンの見解

スウェーデンの経済学者バーティル・オーリンが、その著『地域間および国際貿易』(B. Ohlin, *Interregional and International Trade*, 1933) のなかで展開した国際貿易の概念は、リカアードに迫るものとして注目値する。

彼は、リカアードにたいする批判を極限におしすめ、たとえばイタリアのように北部と南部とに判然と区分された異質市場においては、地域間貿易と国際貿易とのあいだに何ら本質的な差異はないと結論した。

キンドルバーガーは、地域間取引と国際貿易の差を空間の存在によって説明しようと試みた。この空間とは、輸送費が国際間の価格差と比べてより大きい場合貿易が遮断されるかたちで介在する。また、長い国境線を横切って行われる地方的取引が、輸送費を節約するために実現する。たとえば、カナダは西部でアメリカへ石油を輸出し、東部ではベネズエラから石油を輸入している、と¹⁾。しかしながら、キンドルバーガーのこの試みは成功していないように思われる。なぜなら、オーリンが指摘したように、地域間に空間を導入しても輸送費はいぜんとして必要となるからである。長い国境線を接する両国のあいだで輸送費を節約するために地方取引が行われるとするならば、それは国際貿易と地域間貿易との区別を否定する結果を招くであらう。別な視点からの批判が不可欠であると考えられる。

リカアードが設定した国境の標識は、国際貿易の概念確立の前提と言える。それを越えては、資本および労働の移動が本質的に不自由となり、したがって国内市場における競争と国際間のそれとの差異を国際貿易理論を構築していく出発点としなければならない。

オーリン以後、國際貿易の概念規定はあいまいとなり、その結果、國際貿易理論の体系化が嚴密性を欠くようになった。ロイ・ハロッドは、国境を通過する一切の經濟取引が國際經濟現象と定義し、その実例として移民、資本移動それに財の輸出入をあげている⁽⁴⁾。これは全く現象的かつ常識的な説明であつて、本質を究明したことにはならない。

マルクスの見解

國際貿易にかんするマルクスの見解は、彼の經濟学体系構想のなかに展開されている。彼は、『經濟学批判』の「序言」のなかで、ブルジョア經濟の体制を、資本、土地所有、賃労働、国家、外国貿易、世界市場の順序で考察すると述べている。また「序説」のなかでは、つぎのように國際貿易の位置づけを行なっている。

「篇別は明らかにつぎのようになされなければならない。(一) 一般的抽象的な諸規定、したがつて多かれ少なかれすべての社会形態に、ただし右に説明した意味で見られる諸規定。(二) ブルジョア社会の内部の仕組をなし、かつ基本的諸階級の基礎となつている諸カテゴリー。資本、賃労働、土地所有。それら相互の關連。都市と農村。三大社会階級。これらのあいだの交換。流通。(私的) 信用制度。(三) ブルジョア社会の国家形態での総括。それ自身との關連で考察すること。『不生産的』諸階級。租税。国債。公信用。人口。植民地。移住。(四) 生産の國際關係。國際的分業。國際的交換。輸出入。為替相場。(五) 世界市場と恐慌」⁽⁵⁾。

ここでは、マルクスの經濟学体系にかんするいわゆるプラン論争に立ち入るのではなく、彼の國際貿易概念を吟味するのが目的である。まず、マルクスの場合、国家を媒介として外国貿易が発生し、その複合体として世界市場が完成する。思うに、マルクスは当時イギリスが「世界の工場」として機械大工業製品の洪水によって爾余の諸国を資本主義の支配下におく過程を意識していたのではないか。イギリスにおける恐慌がやがて世界市場規模で爆発